大学だより

同窓会諸君に望む

同窓会顧問機械工学科教授　山本　博

広島工業大学同窓会が創立されてから満十年を迎え母校と共に発展されたことを心からお祝い申しあげる。去る五月四日十周年記念祝賀式には万止むを得ない事情が突発的におこり、参列できず誠に失礼した。その式場で同窓会から感謝をこめられた立派な記念品を賜り厚く衷心よりお礼申しあげる。工大での最後の教員生活の日がくるまでは、皆さんの後輩指導のために懸命に努力する覚悟でおる、幸いまだ健康であるからご放念ありたい。

母校も堅実な成長をなし本年度の入学者は関西以西はもちろん、関東からの人数も増し天下の工大となりつつある。これからが大学の研究と教育は実ってくると思われる。ここまでに大学を育成されたのは学長であり総長である鶴襄先生(昭和四十八年四月より学長には前広大理学部長前川力先生、総長に専念され、学園全体の経営にあたられる)のなみなみならぬ熱意と努力に外ならない。

総長は常々十字架を背負う神の子としての信念を心にひめ、学園の企画運営に、学生生活の向上、教職員の生活などの諸問題に関して、短大創設以前から今日に至るまでの幾年月いつも熟慮断行、一度の失策も絶対に許されない集積であったと言っておられる。先生の神の前に跪かれた敬虔なお姿が脳裏に浮んでくる。ほんとうに神とともに歩む人である。私はよい大学に奉職できたと喜んでおる。同窓の諸君もよい大学を卒業されたと信ずる。

広大工学部に精密工学科が昭和三十六年に設置の正式認可を受け、工学部で第十一番目の学科として発足した時に、私が責任者となったが土地・金銭のことは一切心配なくただ人的、物的の問題だけで、鶴先生のご苦心ご苦労に比べれば足もとにも及ばない位の仕事であったが、それでも人の問題では苦労をした。

四十年三月には第一回の卒業生を社会に送りだし、修士課程の設置をみ、四講座も一応完成し研究発表数も増加し内容も向上してきた。しかしながら教員のほんとうの充実は十年を要している。なにかしら十年の努力が実を結び、次の十年に更に前進があるようである。前述の修士課程は三十七年に工学部に設置されたのであるが、その時に博士課程はそう簡単には認可できない。学位のある教授が年一回の論文を発表したとして、少なくとも十編はほしい。その学会で論文賞のとれるような立派な論文が書けなければ、他人の論文は読めないではないかと。文部省で言われたことがある。これも充実した十年が必要であることを意味している。

わが同窓会も今や満十年を迎え次への飛躍の基礎ができたと思う。実社会で活動されている諸先輩はその会社で責任のある地位につき熱心に仕事に励んでおられる話を聞く。増々ご自愛あって頑張られんことを祈って止まない。本年は昭和始まって以来の就職難になるのではないかと想像されるので、後輩のためにも張切ってやっていただきたい。

母校に勤務している同窓生は現在二十名各科においてそれぞれの分野で後輩への講義、実験、実習、卒論などの指導に専念されている。教育と研究を通して人間育成に努力するのが私学の姿であるかも知れない。多人数教育の問題はさておき、勉学に困難と思われる環境にあっても、同窓会としても母校に残っている者は一日も早く成長して、立派な教育者になって欲しいと願うものである。助手—講師—助教授—教授への道は楽ではない。

十年たてば助手は講師へ講師を十年すれば助教授へと、そんな物理的の問題ではない。研究の道は遠く険しいものであれば、よき指導者を得て研究のできる環境に居ることが望ましいがそれにも増して己が自ら進んで研究に熱心にとりくんで努力することのほうが大切であると思う。

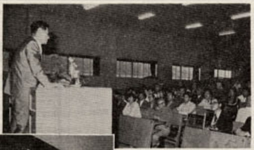
殆どの同窓生は内地留学をし研究の何であるかは身につけられたが、期間が三か月の方々には誠に気毒であった。今後は少なくとも六か月以上行って貰いたい。己れを励まし実力をつけるために苦労の先取りをし、なまじかな気持ではなく、心を改め懸命に努力し頑張ってこそ、諸先生方のご指導を受けることが可能になる。

同窓生の諸君も時には母校を訪れ彼等を激励してやってください。風景絶佳であり諸君らが校庭の方々に植えた卒業記念樹も年々成長し、四季に咲く美しい花花の風情、ゆきとどいた校庭の様子などを改めて眺めていただくなら、人間の育成に、環境は人力の及ばざる偉大な力が潜んでいることも感じとられるであろう。

終りに満十年を迎えた工大同窓会を基として、附属の諸学校を包含し、鶴学園全体としての同窓会へと発展されてはと念願する。

(五〇・六・六記)

横井庄一氏を迎えて記念講演
「生と死の極限の谷間に生きて」



六年ぶりに会場を母校に移しての総会後、同窓会発足十周年記念行事の一つとして講演会が催された。

講師には横井庄一氏をお招きし、物質的にも精神的にもその極限状態の中で二十八年間にもおよぶジャングル生活を送られた体験談を御披露頂きました。

当日は雨天にもかかわらず五日市・廿日市町民の方々も多数来場され、会場の四—二〇一大講義室がほとんど満席になるほどの盛況でした。

同窓会会員の皆さんへ

電気工学科助教授　榊　茂忠

会員の皆さん〝十周年おめでとうございます。

思えば昭和四十一年三月広島工業大学同窓会が発足して早や十年になります。

当時を思い起しますと今は亡き鈴木正利教授のご指導を得て同窓会会則が作られ発足の運びに至ったわけでありますが、発足当時の卒業生は最初の名簿によると短期大学卒業生一八四名大学卒業生八二名、合計二六六名でありました。勿論本同窓会発足前に短期大学卒業生による工友会がありこれを母体として同窓会が成立したものと思います。当時の卒業生諸君のことを思うと、極めて特長のある学生が多く、思い出深いものが多々あります。何時の日か諸君と久しく膝を交えて思い出深い話にふけりたいものだと考えています。

総員二六六名で発足した同窓会が現在では約六、〇〇〇名となり、益々隆盛の一途をたどっていることは誠にご同慶にたえないところであります。しかし、その反面物価の上昇などで経費の嵩むのも事実であります。

したがって、当時からの正会員終身会費も、過去十年間に相当の値上がりとなっていますが、それでもなお、本年度の総会においてまた会費の値上げを決定せざるを得ないのが今日の状態にあると聞いています。こうなれば、せめて名簿作製の時期だけでも卒業生諸君も教職員も何がしかの寄付を行ない、同窓会の盛立てに協力する必要があるのではないでしょうか?

本年度の同窓会誌を見ると、「本部だより」のところに「同窓会の岐路」と題して同窓会の財源難や運営活動方針の行きづまりについて論述されていましたが同窓会をより有意義な方向に永続させて行くためには会員諸君自ら立上がり、進んで総会に出席し、縦、横の連絡を密にし、連帯意識の向上に務め、同窓会の本質であるところの「有形、無形の扶け相」による会員の人間的、社会的向上と、後から続く後輩のために、母校の発展に寄与することを再認識する必要があると思います。

近く同窓会からも奨学資金が出るようになると聞いていますが、誠に喜ばしいことであります。

内外ともに不況とインフレに悩んでいる現在の世相を思うとき、お互に力を合せ、共に手を携えて行くことの必要性は新聞紙上での核家族的不幸の増加を見ても明らかであります。

広島工業大学同窓会の皆さん同窓会の無窮の発展に力を尽して下さい。

われわれ教職員も微力ながらご協力いたしたいと思っています。

—最近の研究室・ゼミ活動から—
「人の和と輪と環」

建築学科講師　西川加祢

卒業生の皆様お元気で御活躍のことと思います。こちら大学内でも同じようで随分変りました。私ども建築学科の研究棟も昨年九月完成し、同時に一号館四階から引越してきました。

窓からは田畑、住宅など自然の眺望もよく西広島バイパスを車が横切って行きます。暑くなるとともに朝日がさし込み、寒くなると日が当らなくなり、夏は暖房、冬は冷房の良く効くところである。しかし、以前のところとくらべ夏の暖房も西日が当るのに較べれば格段に楽である。そのうえ、製図室と図書館も近くになり、大きなケント紙をかかえて、雨の階段を走ることもなくなった。一号館一階にあったゼミ室も今は立派な教室となり、ゼミ学生もそれぞれ離散して行った。特に私のゼミ室は模型用鉄骨建物の中にあったので、狭いうえ、上からタオル、シャツなど吊り下がっていたので、冬などストーブに神経を尖らせていたのも今はなつかしい思い出となった。

ゼミ室と言えば今年から新カリキュラムにより「ゼミナール」が正式授業科目となった。現在「住宅」をテーマとする私のゼミには三年生十余名を中心に四年二年、一年生を加えかなり大世帯となった。ゼミ室も相当広くなったのであるが部屋の広さとともに、どうも横のつながりに弱いようである。それぞれが、バラバラに存在し、勝手に考え独断(?)で行動しているようである。(私の推察が誤っておれば幸いであるが……。)

つまり「人の和」と言おうか「相手を考える自分」と言うようなものが感じられないのである。まだお互いに顔なじみになっていないこともあろう。これを何とか、一つのチームにまとめ、何かをやろうとするまでに育てあげるにはどうしたら良いか、もっぱら思案中である。このことは社会に出て尚、いっそう大切なだけに学生時代から培わねばと思っている。

最近のゼミ活動ではもっぱら実験的経験主義をモットーに現地見学会を中心としている。

先日、第一回目として、五月十八日、広島県竹原市にある江戸時代に建てられた民家を見学することが出来た。そこで御主人の特別好意により、当時の設計図を見せて頂いた。

それは和紙に墨で描かれたものであったが、その中に紙で作った折たたみ式模型の一部に接することが出来、学生ともども非常な感銘を受けた。

和紙に住宅の立面を書きはさみで切っただけのものであるが、今から二百五十年も前に、このようにして考えたであろう跡が、目の前にうかぶようであった。

なんだか、そのシミに汚れた和紙—設計図—を見ていると時間的な隔たりを通り越してしまったような思いであった。そして頭の中だけで議論し、解ったような顔をすることの多い、私自身、反省しなければと思ったのである。

人間の頭の中のイメージと現物とのギャップを少しでも少なくするためには自分の手で、目で確かめる。——物ごとすべて通じるように思える。——

第二回目は現代最先端を行く「マンション」の見学会を行った。ここでは人間が共同で生活するとともにその間取りの取り方を合わせ勉強することが出来た。そして、新しい内装建材、流し調理台、バスユニットなど非常に参考になったようである。

第三回目はもっぱら計画中であるが、これらの結果が、どのように現在ゼミ生に受取られ消化されて行くか、今少し、期待と不安を抱きながら模索中である。

そして、学問追求ももちろん重要であるが、これらの活動を通し、「人の和・輪・環」が大切にされ、そのことにより、個人の「わく」を越えたより大きなことをなしうる社会人として育って行ってくれるように期待をかけるのは無理だろうか。

——これも大学と言う温室の中で言える私自身の甘えであろうか。——

「平凡を愛せよ」

一般教育講師　辻谷忠士

人は平凡な生活に飽きて新しい、珍しい、変化のある何かを求めようとする。そして、それを発見した時今まで経験したことのない興奮や感動を覚える。そのことは、その人にとっては一つの発展であり、変革であることが度々である。

然し、変化ある生活のためにのみ、変化を求めたり日常性の打破のためにのみ新しいものを求めるという態度は、発展でも、変革でもない。最も重要なことは単調と思えるもの、平凡と思えるものに感動し、更にそれらを愛しようとする態度が、変化を求めようとする精神の奥底になければならないことである。単調さ平凡さを愛することと、新奇さ、変化さを求めようとすることとは一見相反している精神のように思えるがこれらは一つのつながりをもっている。即ち、真に平凡さを愛するがゆえに、真に感動ある変化を求めようとするのである。そのようにして求められた変化は、一個人にとどまらず、多くの人々にも同様の感動を与えるであろう。それは、もはや、「創造」と言うべきである。そのような生活態度をもった人との語らいは心安ぐものがあり、生きていることの実感を感じる。彼には偽りがない、誇張がない。あるのは、ものにたいする思いやりと、それによって培われた鋭い洞察力と、創造的意欲である。そんな人々で構成された社会は強く、永続すると思う。

人事異動

○新任

4月1日
- 基礎教育　特例教授　佐々木右左
- 電子工学科　特例教授　大脇健一
- 電気工学科　特例教授　岡沢哲夫
- 機械工学科　特例教授　稲尾民介
- 建築学科　講師　水田一征
- 土木工学科　助手　伊藤秀敏
- 土木工学科　助手　福原輝幸
- 建築学科　臨時助手　上之博文

4月5日配属
- 事務局庶務課(土木)　事務員　寺本清美
- 事務局庶務課(建築)　事務員　安達賀寿美
- 就職事務室　事務員　藤田順子

5月1日
- 建築学科　特任教授　葛西重男

○退職

3月31日
- 基礎教育　特例教授　光藤富士夫
- 一般教育　嘱託助教授　勝野井靖美
- 機械工学科　嘱託教授　高杉悌一郎
- 機械工学科　嘱託技師　古角金一
- 土木工学科　助手　大政求
- 土木工学科　臨時助手　橋本千代司
- 建築学科　臨時助手　古賀照明
- 事務局庶務課　事務員　若林敏子
- 事務局庶務課(機械)　事務員　田中秀子

5月15日
- 建築学科　助手　手越義昭